〈翻訳〉

ソースティン・ヴェブレン「資本の本質について」[1)]

T.B. Veblen, ‘On the Nature of Capital’

田　中　敏　弘　訳

The purpose of this paper is to translate into Japanese T.B. Veblen’s article on the nature of capital.

Toshihiro Tanaka

JEL：B31
キーワード：資本の本質、資本財の生産の生産性
Keywords：Nature of Capital, Productivity of Capital Goods. Veblen, Thorstein Bunde.

I.　資本財の生産性

I.　The productivity of capital goods.

通常、経済理論の説明では、資本を一連の「生産財」と言ってきた。この表現で直ちに念頭に浮かぶのは、産業装置、主として産業過程で用いられる機械装置である。こうした生産財とその他の補助的な種類の資本財がさらにそれ以上に分析を受ける場合には、その生産効率を労働者の生産的労働にまで逆のぼることは稀ではない。というのは、個々の労働者の労働は、通常受け入れられている理論体系では、究極の生産要因だからである。現在の生産理論は、分配理論と同様、個人主義的な用語で書かれており、とくにこうした理論が快楽主義的な前提に基づいている場合には、それはいつものように、そうなのである。

1)　*The Quarterly Journal of Economics*, Vol. XXII, Aug., 1908. より許可を得てリプリントされた。

ところで、他人との関係で人間の行為が真実であるにせよ、ないにせよ、経済的関係では、個人として、実際にも、潜在的にも、孤立し、自給自足の生活をけっしてしていなかった。人間の力だけでいえば、そのようなことは不可能である。個人も単一の家族も、単一の家系でも、けっして孤立した生活を維持することは出来ない。経済学的に言えば、これはに人類を他の動物と区別する、人間性に特有な特徴である。人類の生活史は、多少の規模で、多少の相次ぐ世代にわたる文化の継続をもった、人間共同体の生活史であった。

集団のこの継続性、適合性、あるいは結合の密着性は、非物質的性格のものである。それは知識、慣例、生活習慣、および思考習慣の問題であり、機械的な継続性でも接触でもなく、血縁関係ですらない。人間共同体が経験される場合 ── 例えば文明度の低い人々の間におけるように ── にはどこでも、それは一連の技術知識 ── 少なくとも言語や火や鋭利な刃物や、とがった棒の使用、穴をあけるための何らかの道具や、ある形をした綱や、皮ひも、あるいは繊維、さらに結び目やしばりづなを作る熟練といったような基本的な習得を含む暮らしの問題に役立ち、かつ必要である知識に関する、ある物の所有に見出される。こうした手段についての知識と共に、ある一個人が彼自身の経験だけで習得したり、学び得る域を超えて、暮らし向きの問題で人々が関わらねばならない物理的行為に関するある事実としての知識も一様に存在する。集団全体での救命胴着の着け方でのこうした情報と熟達、および他の集団から借りた財産の自然増は、ただ一世代で作り出されたのではないにせよ、それは非物質的装置、あるいは言語能力が与えられた共同体の無形資産[2)] と呼びうるであろう。

そして少なくとも初期の時代では、これは共同体の資産あるいは装置の最も重要にして重大な種類のものである。このような非物質的装置の共有のストックが利用できなければ、いかなる個人も、共同体のわずかな人も生活すること

2) 「資産」とは、もちろん、この関係で文字通りに捉えられるべきではない。この用語は、当然金銭的観念を含み、産業的（技術的）観念であり、それは価値と同じく所有権を暗示する。またそれは、後の論説で所有権と投資が議論に入ってくるときには、それは文字通りの意味で用いられるであろう。ここでの関連では、それはよりよい用語が無いため比喩的に、それによって所有権無しの価値や役立ちの言外の意味を伝えるために使用されている。

は出来ないし、ましてや進歩しえない。そのような知識や慣行のストックは、おそらくばらばらに、内々に保持されるであろう。しかしそれは、一体としての集団によって、いわばその団体の能力において行き渡った共同のストックとして保持される。そしてそれは、その伝達がいかにあいまいで偶然的なものと考えられようとも、個々人によって、また唯一回の相続によってではなく、その集団によって伝達され拡大してゆく。

手段に関する必要な知識と熟練は、共同体全体の生活の産物であり、おそらくは副産物であろう。したがって、それはまた、共同体全体によってのみ保持され保有されうる。人類の生活史の計り知れないほどの前史的段階に当てはまるものは何であれ、それは最も原始的な人間集団と、ある共同体の維持とその構成員や下位集団の各々の維持に必要な技術知識の大部分が、その個人や一代の子孫には、余りにも大きな負担となる。もちろん、これはもっと厳密で一貫し、もっと進んだ「産業技術をもつ状態」ではなおさら当てはまる。しかしそれは、与えられた文化的共同体が崩壊したり、あるいは構成員の重大な減少に苦しむ場合にはいつでも、その技術的な世襲財産は悪化し、重要性を失う。たとえそれが以前明らかに十分貧弱なものであったにせよである。他方、共同体の個々の構成員あるいは一部の人々がいわば経済発展の比較的低い段階とわれわれが呼ぶ段階から引き離され、もっと大規模で、より効率的な技術の訓練を受けて教えられ、その後彼が生れた共同体に戻されたときには、そのような個人や一部の人々は、共同体全体の技術傾向を理解することが出来ないか、あるいは重大な転換を引き起こすことが出来ないことがわかる。かすかな、おそらくは一時的で、徐々に生じる効果のある技術的結果は、こうした実験から生じるかも知れない。しかしその結果は共同体本体を貫く普及と同化によって有効となるのであり、例外的な訓練を受けた個人や一部の人々の側での効率上例外的に目立った程度から生じるのではない。また、技術的な事柄の継承は、血筋のチャンネルではなく、伝統と習熟のチャンネルによるのであり、これは必然的に、共同体の生活組織と同じく広大なものである。比較的小さい原始的な共同体でさえ、知識や手段の実践のなかに含まれる多くの細目は、膨大であり、――一個人や一家計にとっては余りに大きすぎてそのすべてにおいて完全な熟

練者にはなれないし、それにそれの分岐は広大かつ多様であり、同時にこれらすべての分岐は、共同体の各構成員の生活と仕事に直接、間接に関係している。生活の基準と慣例だけでなく、共同体のどの個人の日常の仕事も、目に見える程の変化が導入された後に、共同体のもつ技術的方策の能力がどの部門においても、良かれ悪しかれ、同一にとどまりはしない。もしその共同体が現代の文明的国民に大きく成長し、この非物質的装置がそれに比例して大きく、かつ多様になれば、その共同体は、技術的細目と共同体の一定の微賤な構成員の財産との関係を跡づけることは、ますます困難となるであろう。しかし、少なくとも言えることは、技術知識とその実践の量および複雑さの増大は、個人の生活や仕事をその支配から漸進的に解放しないということである。

共同体生活において、このように保持され、使用され、伝達されてきた技術知識の補充は、もちろん、諸個人の経験から作り上げられる。経験、実験、慣習、知識、進取の精神は個人の生活現象であり、それは共同体の共通したストックがすべて引き出されるこの源泉から必然的に得られる。共同体の成長の可能性は、個人の経験と進取の精神によって復活される。それゆえ、その可能性は、ある個人が他の個人の経験から学ぶ可能性にある。しかし、例えば、発明やより一層優れた手段の発見のうちに明らかになるような、諸個人の進取の精神や技術的な進取の気性は、過去の蓄積された智恵に基づき、それを拡大する。個人の進取の気性は共同のストックによって与えられる基礎に基づくのでなければ見込みはない。また、そのような進取の気性の達成は共同のストックへの増大を除けば、なんらの効果ももたない。さらに、そのように達成された発明や発見は、発明家や発見者の創造的貢献が既にささいなものと見なされているものを、常にそれだけ具体化するのである。

分っているいかなる文化段階においても、この無形の技術装置は相対的に大きくかつ複雑である。すなわち、いかなる個人構成員がそれを創出し使用する能力に比較してそうなのである。したがって、それの成長と使用の歴史は、物質文明の発展史である。それは手段についての知識であり、それによってその共同体の構成員が生計を立てる物質的案出物と方法に具体化される。そのような方法によってのみ、技術的効率に効果がある。これらの物質的案出物（「資

本財」、物的装置）は、道具、容器、運搬車、原材料、建造物、水路、および使用されている土地に含まれる同様なものである。しかしそれにはまた、主として初期の発展段階の大部分を通じて有用である ── 言いかえれば、それらは経済財である ── と言うことは、それらが手段に関して、その共同体の及ぶところにもたらされたことを意味する。

初期の比較的原始的文化段階では、有用な植物や鉱物は、疑いもなく、未開な状態で使用された。例えば魚や木材が使用し続けられたように。しかし、それらが有用である限り、それらは誤ることなく、共同体の物的装置（「有形資産」）のうちに算えられている。この事例は、一方では、平原インディアンと野牛との関係により、また北西部沿岸地帯のインディアンと鮭との関係により、他方では、コアヒュイラインディアン[3] やオーストラリアの黒人やベンガル湾人のような共同体での野生植物の使用によって例証される。

しかし、時間の経過と共に、経験を積み、進取の気性をもつにつれ、土地になじみ飼い慣らされた（つまり言わば改善された）植物や動物が最初に現われる。したがって、われわれは、例えば多くの種と多彩な家畜や、さらにとくにさまざまな穀物、果物、根菜などの第一級の技術的な工夫を得る。実際、それらはすべて人間によって人間用に創り出されたか、あるいはもっと周到に言えば、信ずべき説明によれば、それらは主として女性によって創られたと言える。ただし、長い間の職人らしい選択と洗練の時代を経てのことである。もちろん、これらは人間がその用途を学んだゆえに有用であり、その用途は学ばれた限り、長い期間にわたる多大の経験と実験によって学ばれ、過去の蓄積された達成の上に一歩一歩と進められたのである。将来、有用性においてこれらを超えるかも知れない他のものは、初期の文化水準では、今でも役に立たず、経済的には存在しない。なぜなら、その時代の人々はそれをまだ学んでいなかったからである。

こうした共同体の非物的産業装置、無形資産は、常に明らかに、相対的に非常に重要であり、いつも主としてその共同体が全体として保持しているが、他

3) アラスカの最北端（Barrows）

方では、物的装置、有形資産は、人類文化の生活史の初期の段階（さらにもっと初期にはまず 90 パーセントが）比較的取るに足りないものであり、明らかに、個人や家族集団により、多少ばらばらに保持されていた。こうした物的装置は、技術発展の初期段階ではきわめて取るに足りないものであり、それが保持される期間は明らかに、漠然としていて不安定であった。比較的原始的な発展段階で、気候や環境が普通の状態のもとでは、それを利用する手段に関する陳腐な知識を必要とする具体的な物品（「資本財」）の所有は余り重要でないことであった。── これは古典的な主張をもつ経済学者たちによって一般に語られてきた見解に反している。通常の技術知識と通常の訓練が与えられ、しかもこれらが通常の評判と日常生活の習熟により与えられているならば── 手はずを整えるのに要する微々たる物的装置の獲得、組立て、ないし収益権は、まず当然のことであり、さらにこの物的装置に、家畜の群や土地になじんだ樹木や野菜の栽培が含まれない場合には、なおさらである。与えられた状況もとで、比較的原始的な技術組織には、例えば、ブラックフット・インディアン〔北米の一部族〕の野牛の囲い（*piskun*）や北西海岸の河川インディアンの鮭の堰のような多少大きな物的装置が含まれるかも知れない。したがって、こうした物的装置の項目は、共同体全体によるか、あるいは相当大きな下位群によって集団として保持され動かされたようである。通常のもっと一般に行なわれている状態のもとでは、相対的に大きな進歩が作物の栽培においてなされた後でさえ、必要な産業装置は、重大な関心事ではなく、ことに、そのような文化段階にある人々の間で一般に行なわれている異常にあいまいで取るに足りない所有権の概念によって示されるような、耕作地や栽培樹木は別としてそうである。太古の共産主義段階は知られていない。

しかし技術知識の共同ストックが、量、範囲、効率の上で増大し、手段についての知識は、より一層効力をもつことになる物的装置が増大するにつれ、個人の能力と比較して一層大きくなる。そしてまもなく、あるいはその限りでは、技術発展は、産業の有効な遂行のため比較的大きな単位の物的装置を要求するような形をとる。あるいはそうでなければ、必要な物的装置の所有を重大な問題とするような形をとる。その限りでは、こうした物的手段を持たない個

人を大いに不利な地位におき、ついで強力な権力が介入し、財産権は明らかに確実な形をとり始め、所有権の原理は力と終始一貫性を増大し、人々は資本財を蓄積し、それを安全にする手段を講じ始める。

産業技術の目に見えるほどの進歩は、通常、人口増加の結果生じるが、それの後に続く生活資料の獲得の困難は、そのような人口増加後には大きくないであろう。それはより小さいかも知れない。しかしそこには利用可能な地面や原材料の比較的な削減が結果として生じる。さらに通常、共同体の幾つかの部分の接近し易さの増大も生じる。そうなれば、広い範囲の管理がより容易になる。同時に、より大きな単位の物的装置が、産業の効果的遂行のために必要となる。こうした状況が発展し、それが相当なものとなり ── つまり、それが実行可能になる。── というのは、強大な権力をもった個人に適したものとなり、個人は、その時の産業技術[4] の状態下で、比較的稀少で生計を得るのに比較的不可欠なような必要物を引き継ぐ。手段に関する平凡な知識は、新しい状況下では利用することは出来ない。余地と数量の事情は新しい技術状態から逃れるのを防ぐ。手段に関する平凡な知識は、新しい事情下では、その時の産業技術の状態に適応した物的装置なしには利用され得ない。さらに、そのような適応した物的装置は、もはや取るに足りない事ではなく、職人らしい独創力と専心によって成しとげられる。所有する者は幸いなり（*Beati possidentes*）。

技術状態の強調は、言われているように、気候の急迫、地勢、植物区系や動物区系、人口密度等々が決めるにつれて、ときにある物的項目に入ったり、別の項目に入るかも知れない。また同様に、同じ緊急の場合の法則のもとでは、財産権や所有権の原理（思考習慣）の初期の発達は、それぞれが共同体のその時の技術効率を独占する戦略的利点を与えるにつれて、物的項目の線に落ちつくかも知れない。

もし、技術状態、産業技術状態が手仕事や職人的技巧や応用に戦略的力点

4) 勲功や競争の動機は、疑いもなく、所有権の実施をもたらし、それが基礎とする諸原理を樹立するうえで重要な役割りを果す。だが、こうした動機の働きと、それにともなう諸制度の成長は、ここでは取り上げることは出来ない。（『有閑階級の理論』（*The Theory of the Leisure Class.*）第一、第二、第三章を参照。

を置くようなものであれば、そしてもし、同時に、人口増大が土地を相対的に稀少にしたり、あるいは他の共同体の構成員が境界外にある土地を歩き回れなくしたら、所有権の成長は、根本的に奴隷制あるいは、奴隷制に等しい状態に向け、その時の手段に関する知識の素朴で直接的な独占的支配に向かわせると予想されるはずである[5)]。これに反して、もし発展がそうした方向をとり、共同体が生計の問題を羊や牛の群れの自然的増大の問題になるようにされるならば、こうした装置は財産権の重要で第一義的な問題となることが予想されるのは道理であろう。実際、田園生活文化は、通常同じく、羊や牛の群れの所有権をもった、ある程度の奴隷を含むと思われる。

さまざまな状況のもとで、産業機械の適用、あるいは耕作可能地は、戦略的利点をもつ場所となり、所有権の対象としてまっ先に人々の考慮に入れられるであろう。知られている（比較的にだが）原始的な文明と共同体によって与えられた証拠によれば、奴隷と牛は、このようにして、土地や機械装置よりも物質文明の成長上の初期には所有権の対象として第一になったことを示しているようである。さらに同じく明らかと思われる ── 実際はもっと明らかと思われるが ──、土地は全体として所有権と共同体の産業効率を独占する手段の根拠地として、機械装置に先行していたのである。

産業装置という言葉が通常用いられる比較的狭い意味における、産業装置の所有権が非物的装置を独占する支配的で典型的な方法となるのは、物質文明の生活史の後期になってからである。実際それは、部分的にせよ、ごくわずかな時だけ達成された成就なのであり、議論の余地のない事実を残すほどの終極のものは一度だけである。もし、奴隷、牛あるいは土地の所有権による支配が、これまでの過程のほぼ十分の九を経過した後にのみ、有効になると粗く言うことができれば、この発展過程のほぼ百分の九十九が、機械装置の所有権が金銭支配の基礎として明白な首位になる前に完了したと、同様に言うことができるであろう。実際このように遅い変革がこの現代の「資本主義」という制度 ── われわれの知るような産業資本の支配的所有権である ── とにかくそれ

5) H. Nieboer, *Slavery as an Industrial System*, 第 4 章、第 12 節を参照。

はわれわれの親しい生活組織で非常に親密な事実であるため、われわれはそれを正しく釣り合って見ることが難しい。したがって、われわれは一方でその存在の否定と、他方では人間のすべての制度に先立つ自然的事実であると肯定する間に、ちゅうちょするのに気付く。

産業装置の所有権を共同体の無形資産に関する制度であると語ることには、意図したものではないが、非難の語調が避け難く含まれる。このような長所短所の含みは、いかなる理論的研究においても、やっかいな事情である。是認否認いずれにせよ、そのような暗黙の非難によって喚起された感情的な偏見は、議論の冷静な追求を不可避的に阻むに違いない。したがって、この耳ざわりな語調の影響を出来る限り緩和するために、しばらくの間、より原始的な遠い昔の制度 ── 奴隷制や地主の富のような ── に戻り、そうして迂回的で漸進的な接近によって、現代の産業資本の事実に達するのが便宜であろう。

こうした所有権、奴隷制、地主の富という古代の制度は歴史の問題である。共同体の生活設計における有力な要因とみなせば、それらの記録は完全である。したがって、それが場合次第で奴隷や土地の所有者による経済的支配の記録であるという意見を強く主張するのには、何の論証も必要ではない。全盛期における奴隷制および中世と現代初期における地主の富の影響は、共同体の産業能率を、前者の場合には、奴隷所有者、後者の場合には土地の所有者の必要に役立たせることであった。この点でのこうした制度の影響は今の問題ではない。ただし、議論を引き留める必要がないような、時々起こる弁解的な仕方のものを除けばのことである。

しかし、こうしたことがそれらの時代の所有者権制度の直接的で即座の影響であったという事実は、問題の制度の即座の非難をけっして含むものではない。奴隷制と地主の富は、それぞれしかるべき時としかるべき文化的背景において、人間の運命の改善と人類文化の進歩に役立ってきたと主張することはむろん可能である。こうした議論が何を意味するかは、奴隷制と地主の富の長所を文化的進歩の手段として明らかにする目的は、今の研究には関係ないし、議論が提出されるさいの主張の長所にも関係しない。ここでの問題は、「資本財」の生産力分析の同様な理論的結果が社会主義的な資本主義批判者と法と秩序の

代弁者との間の論争における主張の長所に触れるのを認める必要のないことに注意を払うのに帰せられる。

経済理論に関しては、地主の富の本質、とくにその生産力に関して、前世紀の間の最もしっと深い警戒と最もねばり強い論理によって変えられてきた。経済学徒なら、それによって経済理論の傾向が突き止められてきた議論の過程をたやすく再検討することができる。ただここで必要なのは、観点を土地の地代に関する議論全体を今の問題に拡げることである。レントは微分的利益の性質をもち、勤労に、あるいはそれについて使用される勤労の生産力の点における微分的利益に基づく。一定の土地区分に加わる微分的利益は、他の区分に対する、あるいは土地は別にして投じられた勤労に対するものと同様であろう。農地に加えられた ── 例えば、勤労全体に対すると同様に ── 微分的利益は技術状況の確かで広大な特性に基づいている。それらの特性のうちに以上のような特性がある。すなわち、人類、あるいはその場合それに関係した人類の一部は、その生息地面積に比して多数であり、生計を得る方法はこれまでのところ精巧であり、生活手段としては、一定の作物や、一定の家畜を使用することである。こうした状態とは別に、農地の地代に関する議論においても、もちろんのことと考えられ、そこには明らかに土地に加えられる微分的利益はありえないし、したがってレントの提供もない。交通手段の取得が増大するにつれ、例えばイングランドおよびヨーロッパ全体の農地は価値において衰退したが、それはこれらの土地の肥沃度が低下したのではなく、等しい結果が新しい方法によって、もっと有利に得られたからであった。したがってまた、バルチック海への入口の水域当りの、今はデンマークやスウェーデン領である火打ち石や木材を産する地域は、北ヨーロッパの新石器地代の文化のなかで、その文化地域内部で最も恵まれた価値ある土地であった。しかし、金属の出現と木材交易が比較的に衰退するにつれて、それらの地域は生産性と特典の尺度において遅れを取り始めた。したがってまた、その後には、「産業」の台頭と交通手段の技術が向上するにつれて、都市の財産が田舎の財産と比較して利益を得、土地が海運に比して比較的有利な位置を獲得し、鉄道が価値を得、こうした現代の技術的便宜を離れては主張され得ない「生産性」を獲得したのであった。

単一課税の主張者や「不労増分」に関する他の経済学者たちの主張は十分よく知られているが、その将来の含蓄は通常認められてはいない。不労増分は、共同体が数の上で増大し、産業技術の発展によって生み出されると考えられている。しかし、この議論には、「土壌の本源的にして壊すことのできない力」を含む土地の価値と土地の生産性には、「産業技術の状態」の関数であるという将来の結論が含まれていることが看過されてきた。一区画の土地が現在もっているような生産力をもつのは、ただ一定の技術状態とその時の手段の組織内だけである。言い換えれば、それはただそれだけの理由で、その限りで有用なのであり、人々はそのようにそれを使用することを学んだのである。これがそれを経済学で言う「土地」の範疇にもたらすものである。さらに、「純生産物」の請求者としての土地の優先的地位は、彼の土地区分の使用を含む特徴のうち、人々がこの技術組織を実施させるかどうか、どこまで使用するのか、さらにいかなる条件でかを決定する法的権利に存する。

不労増分に関するすべてのこうした主張は、ほとんど言葉の変更もなく、「資本財」の場合に繰りのべることが出来よう。デンマークの火打ち石の供給は、千年そこら、石器時代の間に渡り、第一級の経済的結果をもつものであった。したがって、その時代の磨かれた火打ち石の道具は、その場合、文明にとって計り知れないほど重要な「資本財」であり、その世界の人類の生活が磨かれた火打ち石で作られた立派な斧がよく研がれた角で計られてきたと言えるほど重要な「生産性」をもっていた。そのすべては、その技術時代を通じて継続した。火打ち石の供給と機械的工夫とそれが利用された「資本財」は、当時高価で生産的だったが、それ以前も以後もそうではなかった。技術状況が変化するもとで、その時代の資本財は博物館の出品物となり、人間の経済における地位は、別の「産業技術の状態」、つまり人間の技術その後の異なる段階の結果を具現する技術的工夫によって奪われたのであった。改良された火打ち石で作られた斧と同様に、次第にそれに取って替わった金属用具や西欧文化の経済におけるそのようなものは、長期にわたる経験と手段の漸進的学習の産物であった。火打ち石と同様、鋼鉄の斧は、道具の用途と用具の重量による効率だけでなく、刃の同じ古代の技術的工夫を具現している。さらに、あれやこれやの場合、歴

史的に眺望して見たり、共同体全体の観点から見れば、用具に具現した手段の知識は重大かつ必然たる事柄であった。具体的な「資本財」の建設や獲得は単に容易な結果であった。トマス・マンらが言うように、それには「労働以外に何も費用はかかっていない」のである。

しかし、「資本財」の各々の具体的物品は、ある一人の労働の産物であった。したがって、そのようなものとして使用されたとき、その生産性はただ製作者の間接的、将来的で、延期された労働の生産性だったにすぎないと主張しうるかも知れない。しかしこの場合の製作者の生産性は、かれの支配する非物的な技術装置の働きに過ぎず、こんどは、共同体の長い間の経験と進取の精神の精神的蒸留物であった。個々の生産者や所有者に対して、共同体の蓄積された非物的装置が通俗的な醜名によって始まった場合、具体的物財の費用は、その財を作るか取得し、それらを自分のものと主張するのに含まれる努力であろう。このような一群の「生産財」を作ったり獲得しなかったが、かれに共同体の物的及び非物質的な資財が同じ容易な条件で開かれた場合には、問題は大いに同じと見えるであろう。だが、共同体の生活の維持と物質文明の進歩上の資財としては、事柄の全体は異なる意味をもつであろう。

そこまで、あるいはむしろその限りでは、技術的な時間の要求に応えるのに必要な「資本財」は、合理的な勤勉さと熟練をもった一般の人により取得されるのに少し十分である限りは、誰かによる非物質的資産の共通のストックに基づく手形振出しは、誰か他の人の妨げにはならないであろうし、またなんらの差別的な利益や不利益も生じないであろう。経済状況は、古典的な自由競争システムの理論 ── 機会の平等という仮定に基づく「明白で分り易い自然的自由のシステム」にかなり一致するであろう。ほとんど同じように、手工業や「産業上の」企業が、重要な経済要因としての土地という富に取って代わった中世から現代への変遷における西欧の産業生活に付随して起こったのである。特権をもった非産業階級とは別の「産業システム」内部では、わずかに、勤勉、進取の気性、および節倹をもった人は、長年の使用により得た権利あるいは蓄積された財産に関して特別な利点もなしに、かなり出世することが出来たであろう。機会の平等という規則は、疑いもなく、非常におおまかで、あやふやな仕

方でのみ満たされた。だが、この点の条件が非常に有利になると、人々は 18 世紀のうちに納得するに至り、本質的な機会の均等な配分は、財の所有権以外のすべての特権の廃止から生じることを納得するに至った。しかし、技術的に実行しうる機会の平等システムへのこうした接近は、非常に不安定かつ一時的なものであったので、この大きな経済改革に集った自由な運動は、なお集会の表題である間には、技術状況は既にそのような改革計画の可能性を失っていた。産業改革が始まったのち、それは、少し以前にはそうだったかも知れない、おおざっぱな仕方でさえ、はや現存しなくなったり、財産権をじゃまするあの法の前の平等はもはや平等な機会を意味しないであろう。市場の中心にあるすべての経済システムに手本を示し始めた、先導的で積極的な産業では、その産業装置の単位は、新しい技術時代に要求されるので、手段に関する陳腐な知識を自由に使用して、一人の人間がかれ自身の努力により成し遂げうるよりも大きかった。しかし、その時代の空論的な理論家たちは、なおも手工業の伝統とそのシステムに関連した自然権という先入観念と、経済発展の目的ならびに経済改革の目的として、「自然的自由」の観念になおも頼っていた。彼らは彼らが樹立しようと目指した機会の平等という規則が既に技術的に陳腐になったことが見えないほどの効果をもって、以前の状況から生じていた原理（思考習慣）に支配されていたのである[6)]。

数百年以上にわたって、自然権理論がこのように支配した間中、技術知識の成長は絶えまなく進み、それに付随して、大規模産業は大きくなり進歩し、この分野を支配したのである。こうした大規模な産業制度は、社会主義者や他のある人々が「資本主義」と呼ぶものである。このように使用された場合の「資本主義」は、きちんとした厳格な技術用語ではないが、それは多くの目的に十分役立つことは確かであった。その技術的側面上、この資本主義の特色は、その時の産業上の業務には、一個人が自身の労働により成し遂げうるよりも大きな、そして自分独りだけで使用しうるよりも大きな単位の物的装置を必要とす

6) この点をさらに展開した議論としては、*Quarterly Journal of Economics*, July, 1899,「経済科学の先入観念」（*The Preconceptions of Economic Science*）と、同じく『営利企業の理論』（*The Theory of Business Enterprise*）第四章、とくに pp.70-82 を参照。

るということである。

この意味での資本家体制が入って来るやいなや、そのいかなる場合の産業装置の所有者（あるいは管理人）が「生産」という素朴な意味でその生産者であるか、あるいはそうであるかも知れない。彼には産業上の生産的な仕事以外の何らかの方策による所有権や管理を獲得する必要がある。産業上の業務には富の蓄積が必要であり、また暴力、詐欺、相続を除いて、そのような富の蓄積を獲得する方法は、必然的になんらかの取引の形、すなわち、営利企業の或る形となる。産業分野内で富は業務の利得、すなわち有利な取引きの利得から蓄積される[7)]。状況を全般的にとらえ、全体として営利企業体を見れば、結果として利得が生じる、それゆえそこから資本の蓄積が最終的分析の上で必然的に引出される有利な取引は、産業上の富を所有する（あるいは支配する）人々と、この富を生産的産業に利用する人々との取引である。こうした雇用のための取引 ── 通常の賃金協定 ── は、自由な契約の規則のもとで行なわれ、多くの著述家によってよく述べられてきたように、需要と供給の作用に従って決定される。

ここで述べられたように、こうした資本の技術的見解、取引をする両者間の関係、すなわち、資本家としての雇用者と労働階級は、以下のような位置を占める。大なり小なり厳格には、技術的状況は、さまざまな種類の産業において一定の尺度と方法を強要する[8)]。

産業は、実際には、技術的に必要な尺度に頼ることによってのみ行なわれ得

---

7) マルクスは、資本主義が立ち上がる「原始蓄積」は、暴力と詐欺の問題だと考えている（『資本論』第 1 巻、第 24 章）。ゾンバルトはその源泉を地主の富だったと考えている（『近代資本主義』、第 2 巻、第 2 部、とくに第 12 章）。エーレンベルクと他のゾンバルトの批判者は、その最も重要な源泉は高利貸しと小規模の取引であったという見方に傾いている（『フッガー家の時代』（Zeitalter der Fugger）第 1 章、第 2 章）。

8) この「大なり小なり」（“more or less”）という言葉は、規模と方法の点である程度の寛容の余裕を含むのであり、それは他の産業においてよりも、ある種の産業で非常に目に見えるほどであるかも知れない。そしてそれは、合理的に認められるような紙面の範囲内で、ここに十分範囲を限定したり、記述することは出来ない。規模と方法の必要は競争によって実施される。こうした競争による調整の力と範囲もまた、ここでは取扱うことは出来ないが、目下のありふれた事実の承諾は細目を省くであろう。

るのであり、これは一定の（大きな）大きさの物的装置を必要とする。他方、この必要な大きさの物的装置は資本家としての雇用者により、独占的に保持されており、事実上庶民の手にはとどかない。

これに対応する非物質的装置本体 —— 手段の知識と実践 —— は、同じ技術的急務の規則下で、同じく必要となる。この非物質的装置は、一部は、資本家としての雇用者により保有される物的装置の作成において頼られ、一部は、それ以上の産業過程におけるこの物的装置を作るのに用いられる。ある種の産業で利用されるこうした非物質的装置の本体は、徹底した分析では、比較的になおさら大きな存在であり、まさに共同体により今日まで蓄積された産業経験の全体なのである。こうした技術知識の共同のストックに基づく自由な手形振出しは、物的装置の建設においても、その後の利用においても、持たれねばならない。ただし、だれ一人として習得することが出来ないか、あるいは、彼自ら物的装置の一定部分の取り付け、ないし作用に頼って非物質的装置のわずかな部分以上を使用することは出来ない。

物的装置の所有者、すなわち資本家としての雇い主は、典型的な場合、彼の所有する（支配する）物的装置の取り付けとその後の利用に頼る非物質的装置の取るに足りない部分以上を彼自ら使用することは出来ない。彼の知識と訓練は、それが問題になる限り、産業のではなく、営業の知識である[9)]。彼がもつ、あるいは彼の営業に必要なわずかな技術上の熟練は、一般的性格のものであり、職人らしい腕利きの能力という点では、表面的で実行不可能なものである。それゆえ、彼は「自分の営業上」、この非物質的技術装置を動かす能力をもつ人々の尽力を「必要とする」。概して、彼の目的に役立つ尺度は技術的能力の尺度である。およそ労働者は、使用される技術的要件に熟達していない —— 愚鈍さは彼らの愚鈍さに比例して役に立たない。しかも、不熟練で愚鈍と呼ばれる労働者でさえ、比較的わずかだが役に立つ。ただし、彼らは、絶対量で大きくかさばるような陳腐な産業上の細目での能力をもっているかも知れない。実際、「普通の労働者」は、体格以外には共同体に頼むことは何もなかったと考

9) 『営利企業の理論』（*Theory of Business Enterprise*）、第 3 章を参照。

えられる、人間としての空白と比較したとき、高度に訓練されており、広く有能な労働者である。

こうした労働者の掌中では――産業共同体、非物質的な技術的装置――資本家によって所有されている資本財は「生産手段」となる。それらの生産手段なしに、あるいはそれらの手段の使い方を知らない人々き掌中では、問題の財は、いまやそれらを「資本財」とする形を与えられてきたことによって、幾らか乱れ、修理された原材料にすぎないであろう。労働者が複雑な技術装置の熟練上、一層有能になるほど、そしてまた、彼らがこれらをうまく実行しうるならば、それだけ、労働者が雇用者の資本財を活用する過程はより一層生産的となるであろう。したがってまた、「管理」(superintendence) の仕事がより十分であればあるほど、種類、速度、分量の点で、職工長のような仕事の監視と相互関係は生産効率を全体として高めるであろう。しかし、この相互関係の働きは、全体としての技術状態に関する職工長の熟達と、ある産業過程を別の産業過程の必要と結果に比例させる上での彼の巧みさの職能である。産業の諸過程のこうした正しく賢明な相互関係とそれら産業過程全体としての産業過程の必要へのその時の適合なしには、使用される物的装置はわずかな有効性しかもたず、資本財に関して、ほとんど役に立たないであろう。親方職人、技術者、管理者、あるいは、生産過程を管理し相互に関係させる技術的熟練者を指すのに使用される言葉は何であれ、その者によって行使される能力――この職人らしい能力は、与えられた物的装置がどこまで「資本財」として有効に評価されるかを決定するのである。

労働者と職工長のこうした役目によって、資本家の業務目的はいつでも人目につかなくなり、彼の営業努力にともなう成功の度合いは、他のことが同じであれば、これらの技術者が彼の投資した産業過程を営む能力に依存する。これらの労働者や使用されている非物質的装置の所有者との彼の仕事上の協定は、資本家を彼の資本財が彼自身の利潤を説明するのに適合させる過程に向けさせる。だが、それは労働者が彼らの仕事の報酬として要求しうるかも知れない。これらの過程の総生産物からの控除を犠牲にしてのことである。この控除の額は、論者たちにより述べられたような技術的能率の同一的傾向を求めて、賃金

について使用されたかも知れない他の資本家たちの競争入札により決定される。雇用者間の競争入札を排除するために、一企業経営下にすべての物的資産を考えられる限り合併することにより、その結果としての企業体が、労働人口の生計に含まれるような控除による技術状態の不可分の力を要求するであろうことは、はっきりしている。この生計は、そのような場合、雇用者の立場から見て最も経済的な立場に減じられるであろう。そして雇用者（資本家）は、手段に関して共同体がもつ知識総体の事実上の所有者であろう。ただし、この非物質的装置の本体がまた労働人口の家計のきまりきった仕事にも役立つ限りは除かれる。現在の経済状況がこうした最終状態にいかに近いうちに近づくかは見解上の問題である。また諸条件が、包括的な企業統合が競争を排除してしまい、物的資産の所有権を無制限な独占の立場に置いた場合よりは、幾つかの企業間での競争入札を含む現存の企業体制下で諸条件が労働人口にとり大なり小なり有利であるかどうかは明白な問題である。これらの問題への解答においては明らかに漠然として推測しか提出することは出来ない。

しかし、独占の問題と共同体の非物質的装置の使用に関する関係と同じく、今日あるような技術状態は、万一、現存する物的財産の総体の完全な独占化がもたらされたとしても、共同体の技術装置の完全な独占化を許さないことに注意が払われるべきである。それでもなお目下産業過程の大きな本体があり、それには大規模な方法は適用せず、それは、そのような大きな単位の物的装置を推定しないか、あるいは目に見えるほどの物質的な富を持たない人々による適宜な使用範囲から物的装置を取得するような、大規模産業との厳密な関係を伴わないものである。そうした種類の典型的な労働であり、これまで独占化に快く従わない労働は、上に言及された家計上のきまりきった仕事の細目である。実際、人口のかなりの部分にとって、大なり小なり不安定であり、物的資産の所有者たちによって管理されている大規模過程に頼らずに「暮らしてゆく」ことは可能である。こうした手段の陳腐な知識に頼る幾分不安定な余裕は、「生存最低額」へと賃金を巧みに調整し、物的装置の所有者による非物質的装置の事実上の所有のじゃまになるものと見えるらしい。

すべての有形資産[10] は、その生産性とその価値を、それら有形資産を具体化するか、あるいはそれらの所有者に独占させる非物的な産業の工夫に負うと言われてきたものに続いて起る。こうした非物的産業の得策は必然的に共同体の産物、共同体の過去および現在の経験の非物的残余であり、それは共同体の生活から離れては存在しえないし、共同体全体で維持されてのみ伝承されうる。手元にある有形資本財が、それ自体、価値があり、特有の明確な生産効率をもつことは ── もしそれらが役立つ産業過程から離れず、それらが少なくとも産業生産物との因果関係に、存続するこれらの過程にとり、あらかじめ必要な物的必要条件として離れなければ ── 資本の生産力の多くを作る人々によって反対されるかも知れない。しかし、こうした物的財はそれ自体が技術知識の過去の行使の産物であり、したがって当初に戻る。こうした非物的、精神的性質のものでない物的装置が含まれるもの、したがって、共同体の経験の非物的残余でないものは、それにより産業装置が作り出される原料なのであり、その力点はまったく「未加工」にある。

この論点は、技術進歩のため新しい過程を具体化した新しい工夫により取って代わられた機械的案出物に生じるものによって例示される。そのような案出物は、その言葉通り「物の堆積になる。」それが具体的に表わす特有の技術的工夫は「改善された方法」と競争して、産業上の有効性をなくす。それは非物的資産ではなくなる。このようにそれが排除されると、それの物的宝庫は資本としての価値をもたなくなる。それは物的資産でなくなる。リカードウの言葉を借りれば、資本財の物的構成物の「本源的にして不可壊な諸力」は、こうした構成物を資本にしない。実際これらのこうした本源的で不可壊な諸力は、問題のものを経済財の範疇に入れない。原材料 ── 土地、鉱物等々 ── は、もちろん価値ある財産であろうし、営業資産に数えられるかも知れない。しかしそれらがもつ価値は、それらが用いられると期待される使用の役目であり、それは、それらが有用であろうと予見されるもとでの技術状態の役目である。

10) 「有形資産」はここでは、その所有者に所得を生む価格をもつ財産と考えられる役に立つ資本財を意味すると理解されている。

すべてこうしたことは、産業の物理的事実と商品の物理的性質とを軽視するか、あるいは無視するように見える。もちろん、物的財や手仕事の重要性を軽く言う必要はない。この研究が振り返る財は、利用できる材料に働きかける訓練された労働であるが、その労働は広い意味で、労働であるために訓練されなければならず、さらに材料は産業の材料であるために手に入るのでなければならない。そして訓練された労働効率と約束した物的対象の有用性とはどちらも、「産業技術の状態」の機能なのである。

さらに、産業技術の状態は、身体的、知的および精神的な人間性の特色に、さらに物的環境の性格に依存する。人間の技術が作り上げられるのは、こうした要素からであり、この技術は、それがふさわしい物的諸条件にふと出会い、実際に必要とされる物的諸力でやり遂げられるときだけ有効である。動物としての人間の野蛮な力は、産業における不可欠の要素であり、同じく、産業が取扱う物的対象の物質的特徴である。したがって、とくに技術的効率を作る人間的諸要因と対比するとき、産業の生産物、あるいはその生産力がどれほど人間および非人間のこうした野蛮な力に帰せられるべきかを問うことは無駄と思われる。ここで重要な問題を深く追求する必要はない。なぜなら、研究は、産業に対する資本の生産的関係、すなわち、物的装置とその所有権が、人類の置かれている自然環境と人間の取引きにかかっているからである。資本財（その所有権を含む、それゆえ投資の問題を含む）の問題は、知的な種の動物としての人類が野蛮な力を自由に取扱うかという問題であって、環境の力がいかに人間を取り扱うかではない。後者の種類の問題は、植物や動物の適応変異性を取り扱う生物科学の一部門である生態学の項目下に属する。経済学上の研究は、もし環境の力に対する反応が本能的で変動するだけで、技術に関して何も含まない。しかしその場合には、資本財あるいは資本、あるいは労働の問題はないであろう。そのような問題は人間以外の動物との関係では生じない。

労働の生産力の研究には、生産論において人間有機体の野蛮な力の役割や位置に関してある当惑に遭遇するかも知れない。だが、資本に関してはその問題は生じない。ただし、それはこれらの力が資本財の生産に含まれる限りはそうではない。現在の資本研究に大なり小なり密接な関係があるそう入句として、

労働の生産力の分析は、明らかに、人類の野蛮な力（神経力と筋肉力）を人間の支配を大きく超える事情により人間が自由に手に入れうる物的な力と考えるであろうし、大部分は家畜により与えられる同様な神経的および筋肉的諸力とは理論的に不同なものではない。

※　本稿に引き続き、同じく、*The Quarterly Journal of Economics*, Vol.XXIII, Nov., 1908 に寄稿された ‘On the nature of capital II’ が訳出される予定。